76　『外台秘要方』におけるいわゆる「経外奇穴」について

橋本　史代
日本鍼灸研究会

明の董宿著『奇效良方』に初出する「奇穴」という言葉は，現行では，十四経の外にある穴，すなわち経脈の影響下から離れた「経外奇穴」という意味合いが強い．しかし，そうした概念が形成されたのは明代以降のことである．

〈「正穴」（十四経に属する穴）ではない穴〉（仮称「経外奇穴」）を歴史的な観点から解明するため，筆者は本学会第115回学術大会において，唐代前期の代表的な医学全書である孫思邈著『千金方』（以下『千金』）を対象に調査を行った．「経外奇穴」に関する記述は全体で313箇所に見られ，穴数は足，頭面，手部の順に多い．特に手足部の穴は，病が発現する場所から遠隔部の治療穴として頻出する．条文の中では「正穴」「経外奇穴」の区別が判然としない，曖昧で混沌とした内容の記述も多数見られる．五蔵や経脈と穴の関係を探求する上でも，未分化で発展途上の状態にある条文を多く含んだ『千金』は有効な資料と言える．

今回は，唐代中期の医学全書である王燾著『外台秘要方』（以下『外台』）の調査検討を行った．『千金』より100年程後の資料で，明堂灸法七門を収めた巻39以外の諸巻にも多数の鍼灸条文が見られる．検討では，前回と同様，「経外奇穴」の条件を，『甲乙経』『銅人兪穴鍼灸図経』『十四経発揮』中の正穴とは取穴部位の異なる穴とした（穴名の有無には関わらない）．なお「灸陽明」や「刺足少陽」のように，経脈名と見られる記載も，一括して穴名として扱う．

調査の結果，全体で196箇所に「経外奇穴」の記述が見られた（鍼法が21箇所，灸・鍼法ともに可が2箇所，残りは灸法）．そのうち，A：穴名及び取穴部位が記載されるものが13箇所（7%），B：穴名のみであるが正穴以外の穴と判断されるものが37箇所（19%），C：取穴部位のみが146箇所であった（74%）．『千金』ではA：28%，B：20%，C：52%であるから，『外台』には穴名の記載数が少ない．その中でも，経脈名を穴名としたものが30箇所（ほとんどがB）ある．他に『千金』との明確な差として，縄や竹等を用いた取穴法が，『千金』15に対し『外台』は24と，全体の割合としても多いことが挙げられる．

部位別に分類すると，足部62，手部34，頭面部21，項背部19，胸脇部16，腹部12，陰部12，脚部9，臂腕部6，腰尻部4，不明5であった．病門別は，小児諸疾48（癇・足掣瘛驚等40，その他8），中悪蠱注自縊喝溺死凍死19，瘧病16，痔病陰病九蟲等16，霍乱及嘔吐13，淋並大小便難病13，骨蒸伝屍鬼疰鬼魅10，脚気9，心痛心腹痛及寒疝8，虚労7，瘻瘤咽喉癧瘻7，耳鼻牙歯唇口舌喉咽病5，傷寒・天行・温病及黄疸4，乳石4，癖及痃気積聚癥瘕胸痺奔豚3，中風・風狂及諸風3，悪疾大風癩瘡等3，痰飲胃反噎鯁等2，婦人2，咳嗽1，水病1であった．『千金』同様，手足部の穴が多く見られるものの，経脈名を穴名とするものや，「足大指下約中」「足大指甲後横理節上」「足大指下横文」「足大指理中」のように近似した記述が頻出するため，実際は穴のバラエティは少ない．

『鍼灸医学大辞典』（医歯薬出版株式会社，2012年）の『外台』の解説によれば，諸巻（巻39以外）の鍼灸条文では，『千金』の影響が最も強いとある．確かに「経外奇穴」の記述箇所の援用も，『千金』からが最多であった．しかし上記の調査結果から受ける印象としては，全体的に控えめな採録に止められているように見える．もちろん，遠隔部の治療穴として手足部の穴を記述した条文も当然あるため，穴と蔵府（五蔵）・経脈との関係を否定するものではない．ただ，それとは別に，『千金』から『外台』の間に，条文がある程度整理され取捨選択されていった可能性があると考えられる．